

『 この幸いを主に感謝しよう 』

ローマ人への手紙 4章 1～12節

青木 信太郎 牧師

◆ アブラハムの信仰義認

「律法の行いではなく、信仰によって義と認められる」というパウロの聖書理解に対して、当然ユダヤ人から反論が続くであろうとパウロは想定していました。ですからここでも自ら問いを投げかけ自ら答えを提示する形式、ディアトリベーを用いて説明を進めます。

【1節】ユダヤ人は先祖アブラハムを民族の父と称して尊敬していました。先日のクリスマス礼拝でも触れましたが、マタイ福音書1章のイエス・キリストの系図は【アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。】というタイトルで始まっています。ユダヤ人はアブラハムに端を発している訳です。「肉による私たちの先祖アブラハム」という表現は「歴史的、民族的において私たちの偉大な父であり先祖であるあのアブラハムの場合はどうなのでしょう？」というニュアンスです。さて、皆さんはどうお考えですか？アブラハムはその行いによって義とされているのでしょうか、それとも信仰によってでしょうか？

パウロは旧約聖書に照らし合わせながら答えを明かしています。【2-3節】その答えとは「私たちユダヤ人の父と称するアブラハムでさえ、神の前で誇れるものは何一つない。アブラハムはただ信仰によって義と認められた。」であります。【アブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた。】パウロがここで引用しているのは創世記15章6節です。旧約聖書には、アブラハムがその行いではなく信仰によって義と認められたことが明確に記されているのです。アブラハムは神が約束された地カナンに入って15年ほど経過しており、約90歳になっていましたが、彼には子どもがありませんでした。かつて主は「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。(創12:3)」と約束されたのに、まだ自らに子どもが与えられていなかったのです。妻のサラも80歳を越えていました。一体あの約束は何だったのだろうか不安と疑いに駆られるアブラハムに、ある夜、主が幻の中で語られました。神様は彼を外に連れ出してこう言われたのです。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。あなたの子孫はこのようになる。(創15:5)」どう考えても実現しがたい約束です。にもかかわらず、この時、アブラハムはこの神のことは信じました。そして、信じるアブラハムを神は義と認めてくださったのです。かつて「あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。(創12:1)」という主のことは信じて、アブラハムはカナンの地へと旅立ちました。後に「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを～全焼のいけにえとしてわたしにささげなさい。(創22:1)」という主のことは彼は信じて従いました。私たちはアブラハムが神に忠誠心をもって従った行いに目を奪われがちです。しかしアブラハムは先ず主のことは、主の約束を信じる信仰者でありました。

◆ ダビデの信仰義認

続いてパウロは、アブラハムと並んで旧約聖書の代表的人物、ユダヤの偉大な王ダビデについて説明します。ユダヤ人はかつてイスラエル統一王国のダビデ王こそ偉大な王と称していました。そしてダビデのような偉大なメシヤを待ち望んでいました。【アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。】で代表されるダビデです。【6-8節】皆さん、ダビデはその行いによって義とされたのでしょうか、それとも信仰によってでしょうか？【ダビデもまた、行いとは別の道で】とは「行いによらないで、行いと関わりなく」という意味です。パウロはここでダビデの有名な詩篇32篇を引用しているのですが、これはダビデが“幸い”を歌っている詩篇であると説明します。【詩篇32:1-2】ダビデは「幸いなことよ。幸いである」と歌うのですが、ダビデにとっての幸いとは何だったのでしょうか。「背きを赦さ

れ、罪を被われたこと。主によって罪が認められなかったこと」は何と幸いであろうかとダビデは歌ったのです。信仰によって義と認められるということは、その罪が認められないということに他なりません。この詩篇は有名なダビデの悔い改めの詩篇です。かつてダビデは部下ウリヤの妻バテ・シェバに一目惚れしました。そしてダビデはバテ・シェバと姦淫の罪を犯しました。そのみならずその罪を隠蔽するためにウリヤを最も熾烈な戦場へと送り込んで死に追いやりました。何と恐ろしい罪でしょうか。詩篇32篇を読み進めると、ダビデは自らの罪に悩み苦しみました。主なる神様もダビデの罪を見過ごしにはなりません。預言者ナタンを遣わしてダビデの罪を指摘します。自らの罪を指摘されたダビデは【私は主に對して罪を犯した。(Ⅱサ12:13)】と自らの余りにも大きくて深い罪を悔い改めます。その悔い改めに呼応されるかのごとく、神は直ぐにダビデに対しての罪の赦しを宣言してくださったのです。主なる神様はダビデに罪を自覚させ、罪への悩みを与えられ、そして悔い改めの道を用意してくださいました。行いではなく、悔い改めの信仰です。信仰とは自らの罪を悔い改めることであり、その罪の刑罰をイエス・キリストが身代わりに十字架上で受けてくださったことを信じるということです。そして信仰そのものが主なる神様からの賜物なのです。それを自ら痛感して体験したダビデもまた行いではなく、その悔い改めの信仰によって神の前に義と認められたのでありました。

◆ この幸い

9節以降、パウロは再びユダヤ人の父祖アブラハムが神の前に義と認められたのは、割礼のしるしが与えられる前だったのか、それとも与えられた後だったのかという興味深いアプローチを行います。【9-10節】その答えは【v11-12】。創世記15章を読むと直ぐに分かるのですが、アブラハムは【主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。】という事実は創世記15:6です。そして神様が改めてアブラハムの子孫を増やすと祝福の契約を繰り返してくださった創世記17章において、そこで神様は祝福の契約のしるしとして初めて割礼を守ることを命じられたのです。「割礼を守っているから神の前に義と認められているわけではない。割礼の有無は関係ない。割礼の前に信仰によって義と認められたアブラハムは割礼を守るユダヤ人の父であるのみならず、罪を悔い改めてイエス・キリストが救い主であると信じる信仰者の父であるとパウロは説明したのです。私たちキリスト者、信仰者が何か大きな感動をも抱く様なこのパウロの説明において最後に注目したいことがあります。それは9節の書き出しです。パウロは最初にアブラハムは行いではなく神を信じる信仰によって義とされたことを説明しています。そしてダビデも同様なのですが、ダビデはこの信仰による義を“幸い”と歌いました。行いではなく、ただ信仰によって神に義と認められることは恵み、幸いであることを今朝のテキストで強調しているのです。私たちが罪を悔い改めてイエス・キリストを信じる信仰によってのみ神の前に義と認められる、この信仰義認という恵みは“幸い”と呼ばずして何と言えましょうか。

◆ まとめ・お勧め

今年一年、私たちはイザヤ書12:2を年間聖句に「主に信頼する教会」として歩んできました。一年の最後に私たちが共通して感謝したいことは、私たちは救い主なる神を信頼して礼拝し、祈り、交わりを大切にしてきたということです。なぜ私たちは主を信頼して歩み続けることが出来るのでしょうか？主は「私のために救いとなられた」からです。信仰が私たちの共通の土台であります。私たちは信仰によってのみ義とされたという「この幸い」ゆえに主に信頼して歩むことが出来たのではないのでしょうか。おひとりおひとり様々な局面があったことでしょうか。皆同じく言えることはコロナ感染症に揺るがされた一年でもありました。しかし私たちは信仰による義、この幸いを土台として主に信頼して歩み続けて来ることが出来ました。今朝、この幸いを主に感謝して一年最後の礼拝と致しましょう。